

アフガン・NGOの現場で 朝日労組西部支部・新研集会

中村哲氏は1946年、福岡生まれ。九大医学部を卒業後、医師の道に進み、パキスタンでハンセン病治療にかかわったのがきっかけで、「ペシャワール会」を設立してパキスタン・アフガニスタンでの医療・援助活動を続けている。11月9日に一時帰国。空爆の続くアフガニスタンの現状と、報道する側への注文を聞こうと、朝日労組西部支部が11月12日に企画した新研集会の講師として招いた。市民にも参加を呼びかけ、集会には300人が集まった。
(講演会場を除く写真と地図はペシャワール会ホームページから転載)

●アフガニスタンの社会

私たちは、ペシャワールというパキスタン北部の国境の町に基地病院を構え、パキスタンに2カ所、アフガニスタンに8カ所の診療所を運営しています。現地スタッフが約220名、日本人スタッフが6名で、年間20万人、今年はおそらく30万人から40万人の診療をしています。といいますと、かなり大きな組織であろうと思われそうですが、実は私たちのペシャワール会は全くのボランティア団体で、福岡市の事務局で20名から30名の事務局員が事務整理をしながら、これだけの事業を支えています。設備投資を入れますと年間1億円前後の規模で、うち8割以上が、全国に4000人いる会員の募金によるものです。組織の維持費が非常に少なく、約95%以上が現地に届きます。規模1億円という、国家間援助とか国連の事業に比べると少ないですけど、コストパフォーマンスは数十倍まさるといって、みんな張り切ってやっております。

現地は岩石砂漠といいますが、乾燥した、水の少ない地域なんですね。(スライドを示し)これはカイバル峠と言うところで、アフガニスタンとパキスタンの主な国境のひとつですが、ごらんの通り荒れた岩山が多い。わずかな川の流れを頼りに、川沿いに村落ができて、オアシス的な農業が営まれています。北緯33度、だい



たい福岡市を真西に7千キロ行きますとペシャワールに着きます。降雨量は日本の約20.0分の1で、冬は非常に寒いけれども、夏は暑い。私がいる時の一番の記録で52度というのがありました。こういう過酷な自然条件の中で、みんな生活しているわけです。

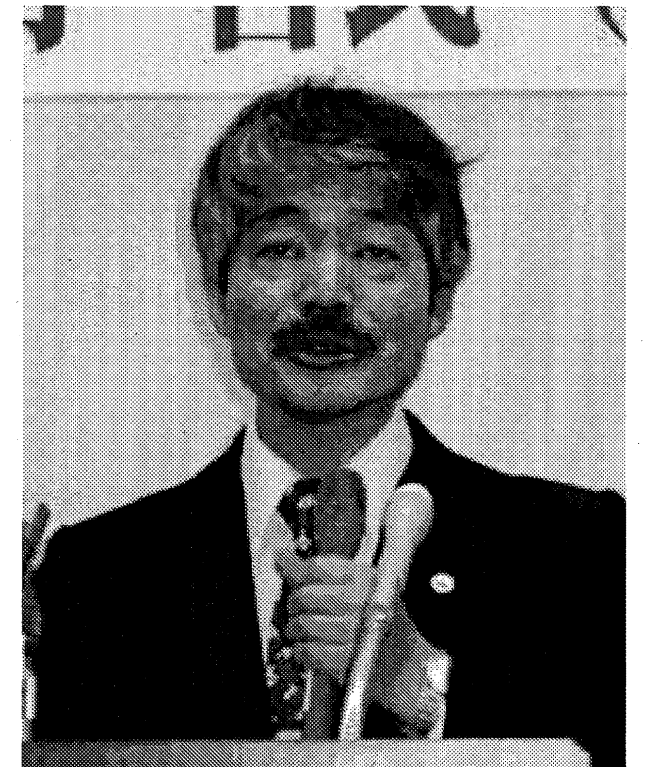
もう一つ、パミール高原から西にのびるカラ

コルム=ヒンズークシ山脈は、ヒマラヤと並ぶ世界の屋根の西翼をなしています。アフガニスタンのど真ん中に、このヒンズークシ山脈がでんと座っていて、6000メートル、7000メートル級の山がずらりと立ち並ぶ。この山脈だけで日本列島がすっぽり入るくらいの大きさがある。アフガニスタンの面積が日本の約1.6倍。人口はまともな調査ができず、1200万人から2400万人と幅がありますが、大体1500~1600万人というのが正しいところではないかと思えます。住民はこういう山あいの谷、あるいはより大きな川沿いに生活しており、私たちの活動も、ひとつの大きな柱は山岳部の診療体制の創設です。この山の中、自動車が走るところはむしろ少なく、歩いたり馬に乗ったりして、片道1週間の診療場所というのは決して珍しくないんです。

現地はご存じのようにイスラム社会で、田舎にいきますと100%がイスラム教徒。中世のヨーロッパのキリスト教会のように、モスクを中心に共同体ができる。その共同体を取り仕切るのがジルガという長老会です。ちょうど隣組が少し大きくなって、司法権まで持っている、地域的な割拠性の強い社会です。例えば、私たちの活動の関係ですと、ハンセン病患者が迫害を受けている時に、我々は警察に訴えたり裁判所に訴えたりはしません。金曜日にモスクにみんなが集まってきますから、そこで訴える。そういうことは、教えに反するんじゃないかと。ちなみに私はイスラム教徒じゃない、キリスト教徒ですけど、受け入れてくれるんですね。つまり、自分の信仰をじゃましない者は、決して敵対することはない。ふつうのおじさんおばさん、我々とそのへんは変わらない、そういう社会。

いまでも流通機構の末端というのは、おそらく10世紀は変わっていない、シルクロードの隊商の世界です。場所によっては物々交換の世界で、こういう人たちが何を考えているのか、どういうことで怒るのか、悲しむのか、何がうれしいのか、ということを理解しないと、なかなか患者の気持ちは分からない。非常に時間がかかります。

貧富の差があまりにはなはだしい。約10%の人口が国の富の約8割以上を占めているとい



中村 哲 (なかむら・てつ) 氏

1946年福岡市生まれ。九州大学医学部卒。趣味の登山が縁で訪れたパキスタンにハンセン病がまん延していることを知り、現地での医療活動を決意。1984年に赴任後、同病のコントロール計画に携わりつつ、活動の場をアフガニスタンにも広げていった。2000年にアフガンで大干ばつが発生すると井戸掘り事業も開始。同事業が軌道にのりかかった矢先のテロ・報復戦争のぼっ発だった。NGO「ペシャワール会」の現地代表として、「新たな難民を生み出さない食糧援助活動」を唱え、実践している。

う世界で、お金持ちは風邪をひいたくらいでロンドンやニューヨークに行けるけれども、大部分の人々は、数百円の薬が買えないばかりに死んでいく。いかに少ない金で、いかに多くの人に恩恵を及ぼすかという、現地に合った医療のやり方を模索しながら、私たちは17年間苦労してきました。

●ハンセン病と女性

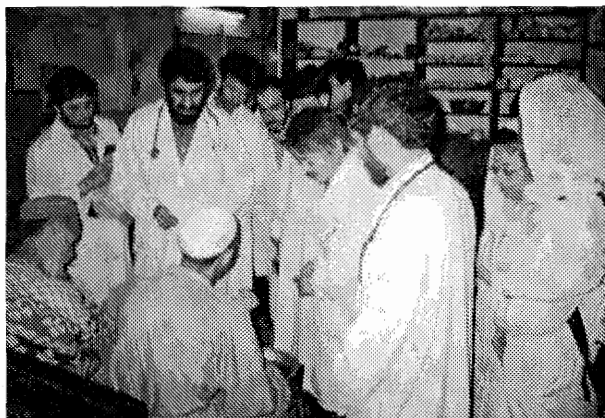
私が現地に行ったのは1984年5月のことです。当時ハンセン病コントロールプログラム

というのができて、その治療センターを充実してくれということに参りました。どんな立派なセンターかと思ったら、(スライドを示し)この写真に出ているのがすべての医療器具なんですね。当時患者さんが2400人おりましたが、現在では7000人に膨れ上がり、最終的には2万人になるだろうと近い将来思われますから、いくらモノや金ではないといったところで、やっぱり物量は無視できない。そこで、ペシャワール会の活動がにわかに活発化してきたわけです。

ハンセン病の治療は、薬だけではなくて、いろんな局面があるんですね。神経と皮膚が冒されますので、眼科的なケアや形成外科的な手術も必要ですが、まともに機能する施設というのは、アフガニスタン全土およびパキスタン北部でペシャワール会の病院しかないという状態です。しかし実際には、私たちのエネルギーの大部分は、医療とは一見関係のないところに注がれてきました。

その一つに、日本人にはあまり縁のない現地の文化・風習といかに溶け込んでいくかということがありました。今、国際的にやり玉に挙げられている女性を隠す習慣、ブルカというかぶりものがありますが、現地では男女隔離の習慣がきわめて厳しいんですね。私も男ですから、女性患者を診察する時、聴診器を直接胸をはだけて当てるのは屈み、不道德な行為と見なされる。それで、服の上から当てるんです。ハンセン病の初期症状は皮膚に出てきますから、男性であればくまなく皮膚をチェックします。ところが女性の場合、そんなことをすると大変ですから、どうしても発見が遅れる。だから女性の感染者が絶えない、むしろ増えつつあるというのが現実なんです。そこで、こういう風習があるから医療の恩恵に浴せないんだということで、いわゆる人権活動家のような人々がやってきて、許すべからざる性差別である、と現地で非難する。当然現地と衝突するわけで、国外追放になる。ニューヨークやロンドンに帰りますと凱旋將軍のように迎えられます。外国から来る人々は自分の思想が満足されればいいでしょうけれど、私たち医療をする立場としては、残されたこの患者をどうしてくれるんだ、と言いたい。

ペシャワールのPMS病院で回診する



人間というのはそんなに自由なものではない。私たちの身の回りのことを考えても、一見自由な感じはしますけれども、いろんな制約の中で暮らしているわけですね。日本人であるという制約、福岡市に住んでいるという制約、男である、女であるという制約、年齢という制約、限られた時間の中で生きざるを得ないという制約、職場の中の制約など、思ったほど自由ではない。現地でも同じことで、数世紀前からある慣習について、我々とはやかく言おうとは思わない。その制約の中で彼女らにとって一番幸せな状態は何かとすることをアレンジしなくては、本当の臨床医学とはいえない。そのために、十数年前からペシャワール会を通じて、のべ20人以上の看護婦さんや女性の理学療法士らが現地へ行き、治療にあたっています。これによって女性の患者の発見率が向上し、また、下腹部を処置する導尿など、男の我々にはできなかった女性患者のサービスが可能になりました。現地の文化や風習については善悪で判断してはいけません。それはそれとして受け入れて、彼ら自身が変わってくるのを待たねばならない、と思います。

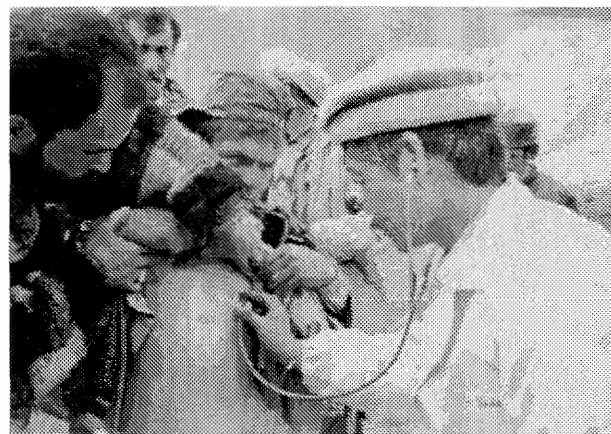
●戦争と診療所開設

私が赴任した84年から91年までは、アフガン内戦が最も激烈な時期でした。1979年12月、時の共産政権を擁護するという目的で、当時世界最強の陸軍といわれた旧ソ連軍の10万人の精鋭部隊がアフガニスタンに入ったわけです。以後今に至るまで、内戦で死亡した人は、一般市民の犠牲を含め200万人は下らない。200万人と簡単にいいますが、福岡市を2倍

するぐらいの人が、こんな小さな貧しい国で死んだんですね。いくらパキスタンでコントロールプログラムを実施していても、新手の患者が次々とアフガニスタン側から現れてくることで、私たちも医療の立場から巻き込まれていったわけです。

ただ当時は、農村部が主な戦場でした。その農村部が我々のターゲットでしたから、じゃあ助けに行こうかと言ってブラブラ行ける状態ではなく、細々と難民キャンプで仕事を続けていました。ここで私たちペシャワール会、現在のPMS(ペシャワール会医療サービス)は方針の大転換をしました。まず、ハンセン病だけみる診療は成り立たない。ハンセン病が多いところは同時に結核、マラリア、腸チフス、デング熱など他の感染症、ありとあらゆる感染症の巣窟です。死にかけているマラリアの患者をほったらかして、あなたハンセン病じゃないから診ません、というわけにはいかないんですね。それと、ハンセン病や感染症の多い地区というのは、山の中の無医地区が多い。私たちは難民キャンプ診療を転機として、ハンセン病の根絶という旗は下ろさないけれども、多くの人々に恩恵を及ぼすため、一般診療にまで拡大する。いずれ難民は帰っていくだろう。ソ連軍が将来撤退したあかつきには、アフガニスタン内に診療所を設けて、本格的なコントロール計画を何十年かけてもやろう、と方針転換したわけです。

ペシャワールの病院の中でスタッフを育成しながら、現地を見て回りました。まだ共産政府からの爆撃がひどい時期で、女性・子ども・老人の弱い人たちは難民キャンプに送り、男たち



山岳部で診察する中村医師

はふるさとにとどまって戦っていました。政治党派が中心となって政府軍と戦っていたわけではなく、地域の住民そのものが、外敵に対してばらばらに抵抗していたというのが現実でした。この中で、私たちと住民との接触が始まったわけです。

まともに道路は通れませんでした。パキスタン・アフガニスタン2400キロメートルの国境は決して閉鎖できない。我々も山越えをしながら国境を越えて、谷から谷へと、いったいどこに何人住んでるのか、どういう病気が多いのか、(診療所の)開設予定地の調査をしていたわけです。

(スライドを示し)これはヌーリスタンという、アフガニスタンでは一番山奥といえますか、標高2千数百メートルの地域です。外国人を見るのは初めてという地域が多く、私が初めて行ったときには、ドクターはフランス人ですか、と聞かれました。いや日本人だというと、急に態度が変わって、すごく親日的なんですね。日本が、おそらくアフガン社会の中では、一番知名度が高い。どんな山の中に行っても知っていて、しかも友好的。なんで友好的であるかというと、まず日露戦争。それからヒロシマ・ナガサキ。この3つは、だれでも知っています。考えてみれば、日本という国も150年前までは現在のアフガニスタンの山の中に近いような状態だったわけです。北からのロシアからの脅威と、南からの英米・フランス・オランダなどのサンドイッチの中で、近代的な独立国家としての形成をしてきたといういきさつは、非常によく似ているわけですね。「攘夷運動」のようなものが盛んな中で、日本人である我々だけはちょっと外国人と違う、というほど扱いが違っていました。そのおかげで、私は自由に、幸い言葉がいろいろしゃべれたものですから、現地の人々とつきあいを深めていったわけです。

そうこうするうち、88年だと思いますが、ソ連軍の撤退が伝えられたときに、世界中から難民帰還プロジェクトというのが大々的に行われた。国連関係の資料によると約200億ドルが使われましたが、ソ連がなくなり、湾岸戦争が始まると、いつの間にか救援団体は消えてしまった。内戦はますます激しくなる状況の中で、あの援助はいったい何だったのか。92年にな

って、共産政府が倒れ、それに対し地方に散っていたいろんな政治党派がカブールを目指して、一斉に集まった。戦場が農村から都市に移るといふ事態が起こり、難民たちはほとんどが農民でしたから、一斉に、ほとんど誰の力も借りずに帰ったわけです。200億ドルを使っても帰らなかった難民たちが、92年5月から12月までの間に、270万人のうち200万人が自発的に帰還するという事態が起きたわけです。

さあ、今から私たちの活躍する時期が来たということですが、みんな帰っても、家は爆撃で壊れた、畑は荒れている。まずは農村の復興援助と言うことで、東部にある3つの農村地帯・山岳地帯の診療所を次々と開きました。帰ってくる難民を待ち受ける形で、まとまった診療チームを月ごとに交替で送り、助ける。とてもうれしかったですね。ほとんど欧米の団体は活動していなかった。ペシャワール会はその当時から慢性的な赤字に悩んでいましたが、ぎりぎりいっぱい支援を続けてきたわけです。

●マラリアと診療所襲撃

当時の忘れられない出来事として、悪性のマラリアの大流行がありました。免疫のない状態でかかりますと、日本人であればたいい死ぬんですね。私たちの医療活動がカバーする70万人から80万人のエリアで、死亡を確認したのが5千数百名。周りの人が次々死んでいく、こんなことじゃあ帰ってこなきゃよかった、難民キャンプの方がましだった、という動揺が住民の間にみられました。私たちも朝から晩まで診療してもせいぜい2百数十名が限界なんです。何日か歩いてきたのに、「明日きてください」というと、不安に駆られる人もいます。

93年、このマラリア大流行の時、診療所が一時包囲される事件がありました。私が北部の調査から帰ってきてダラエ・ヌール診療所というところに寄りますと、何事か、と驚いた。人がいっぱいたかって、薬をよこせ、と叫んでいる。そのうち興奮した住民が投石を始める。投石だけならいいけれども、その当時内戦の直後でしたから、武器を平気で使う。飛び道具が飛んでくる。ロケット砲が撃ち込まれる。幸いロケット砲は当たらずに、私はこうして話していますが、村の協力者、準職員が2名殉職しまし

ダラエ・ヌール診療所の診察風景



た。

現地の人間関係を規定する最も重要な掟は、目には目を、歯には歯を、という徹底的な復讐法と、客人をもてなすことです。だから、2人やられると、我々も2人やり返さないと恥になる。法律よりもこういう慣習法の方が優先する社会なんです。その時中にいた18人の職員は、リーダーである中村が「撃て」という指示を出すかと思っていた。しかし私が言ったのは「撃つな、発砲しちゃいかん」。みんなギョッとしまして、「本当ですか、先生本気で言ってるんですか」というから「本気だ」。「皆殺しになってもですか」というから「皆殺しになっても発砲しちゃいかん」。診療所がスタートしたばかりの時、ここで住民と武力衝突すると、我々の計画をやめなくちゃならない。私は、「たかが十数人の命がなくなったとて、数十人がペシャワール側に控えておるじゃないか。ここで発砲すれば全部だめになって、何千何万の人の命が助からないだろう。それよりもここでじっと平和にしとった方がよろしい」と申しました。さすがにしーんとなりまして、幸い殉職者は2名で済みました。

翌朝、私は地域のジルガ、長老会を開かせまして、「我々は朝から晩まで、何の下心も政治的な意図もなくやっておるのに、昨日の仕打ちは何であるか。首謀者を差し出すか、あるいは君たちが診療が必要だと思うなら、自分たちの手で守れ、とにかく治安を回復せよ」とどなって、各村から数名ずつ武装した要員を警備に当たらせました。薬は心配しなくていい、我々がたくさん補給するからと言って、またさんざん苦労して山越えをして、ペシャワールにたどりつきました。そしてペシャワール会の福岡の事務所

に「ありったけの金を全部送れ」というと、「先生30万円しかない」という。その30万円がいいから送れ、と言いかけて、30万円でも何人助かるだろうか、と思ってぞっとしました。その当時、悪性マラリアに効くキニーネという薬は、一人あたり220円かかりました。だから30万÷220、千数百名しか助からないんですね。あとの人は気の毒だけど死んでもらわなくちゃいけない。さすがに私も愕然として、人の命は平等だというけれど本当だろうか、その時から疑いの目で見えています。今度の報復爆撃なんかを見ていても、アフガン人の何百万の命はそんなに軽いものなのかと。数で人の命は決して測れませんけれど、私はそう思うんですね。ともかくこの時は、新聞で大々的に報道されて約2000万円の募金が集まりまして、我々はアフガニスタン東部の地域で絶大な信頼を勝ち得たわけでございます。

私たちの基本方針は、我も我もと押し寄せる場所には、行く必要がない。だれかがするであろう。それよりも必要性があつて、なおかつ誰も行かないところ、したがらないところに行くべきだ、ということです。現在、奥地へ奥地へとアフガニスタン・パキスタンにまたがって診療活動範囲を広げています。じっと細々とでも診療を続けながら、この人々にとって何が一番いいのか、まだまだ模索している段階です。

●大干ばつと水源確保

そうこうするうちに15年が経ちまして、3年前、会員の募金7千万円を投じて、ペシャワールにPMS病院という70床の病院を立ち上げました。ここを基地として、各地の診療所に月交替でスタッフを配備するという長期体制を取りました。第2期を30年と定めて、現地パキスタンの福祉法人として定着したわけです。

アフガニスタンでは、94年にできたタリバーンが、2、3年のうちに国土の9割を治める状態になりました。もう戦乱はいやだと、各地域がタリバーン政権を迎え入れた。ソ連が去った後の無政府状態というのは耐え難いもので、わずか数年の間にカブール市民が2万数千名、内ゲバや市街戦、婦女暴行、略奪、強盗の犠牲になったのです。各地域の長老会、ジルガが、我々の平和な生活を保障する限りにおいてタリ

水源確保のため井戸を掘る



バーン政権を支持する、という声明を出しました。こうして、やっと国家統一がなろうとしたところに、大干ばつが起きたのです。

これは今まで人類が体験したことのないような干ばつで、アフガニスタンの人口の半分の1千万人以上が被災。周辺のタジキスタン、ウズベキスタン、モンゴル、中国西部、北インド、パキスタン西部、イラン、イラク北部などを合わせると約6千万人が被災するという大規模なものでした。中でも最もひどかったのはこのアフガニスタンで、次々こういう光景が広がっていったわけです。

(スライドを示し) これはカブール川。インダス川の支流で、普通の真夏なら、落ちると死体が上がらないくらい、とうとうと流れている、その川の水が干上がっている。アフガニスタンの乾燥地帯では、冬に積もる雪が夏に解けて各川沿いの地方を潤すのですが、その水源が枯渇していく。降雪量が減る、つまり地球温暖化によって貯水槽が減ったために、未曾有の大干ばつに見舞われたわけです。

水がなくては人間は生きられない。井戸水も次々と枯れていきましたから、飲料水がない、食器が汚染される、病気がはやる。栄養失調状態の子どもたちが赤痢にかかり、簡単に命をなくしていく状態が、昨年からはるところで見られました。私たちの診療所でも、数百人が列をなして待っている。ほとんどが自分の子どもを抱いた若いお母さんです。その間に子どもの体が冷えていく。それを抱えておろおろしている、という光景が普通に見られました。みんな往復半日かけて水を取りにくるという状態で、病気が蔓延しない方がおかしい。診療所の付近でも、

家畜が死ぬ段階で農民たちが村を空け始める。廃村、無人の村が次々と広がっていったわけです。

(スライドを示し) これはトルカマの国境ですが、干ばつ避難民でごった返すという状況がすでに1年数ヶ月前から続いています。医者がこんなことをいっただけですけれど、病気なんか後で直すから、とにかく生きていなさい、という状態だった。そこで、村の人を総動員して、水源を確保しようという作業を、干ばつ地域一帯に展開しました。現在作業地が660カ所、そのうち水を得たところは5百数十カ所で、約30万人が村を捨てずにすんでいる。ペシヤワール会、小さなNGOとしては大きな仕事を始めていたわけです。

医療活動を続ける一方、約4000万円を投じて、対策本部を置き、東部一帯の水源確保計画を本格化させました。こういうと語弊がありますが、1千万発アフガニスタンにあるといわれる地雷が、私たちの仕事には非常に役に立ちました。掘りにくい地層で、庭石どころかマイクロバスぐらいの巨石にぶつかると、住民は手を出せない。そこで私たちは、削岩機で石に穴を開け、それに拾ってきた地雷からかき出した火薬を詰め、爆破する。この方法で、次々と掘って水を出したわけです。本当に水が出てくるというのはうれしいもので、みんなが群がってくる。女性の権利がどうのグルカがどうのと言っていた人たちは、この農村女性の姿を見たのかとそう言いたい。マニキュアをする自由、グルカをかぶらない自由、化粧をする自由よりも、人権の中で最も偉大なものは、生存する権利であると。

●カブールで食糧配給

私たちは去年の今頃、そのうち国際的に大きな団体が殺到してくるであろうから、それまで自分たちはがんばっておこう、と一生懸命やってきました。ところがやってきたのは、救援ではなく国連制裁。アフガニスタン中に外国人排斥ムードが起きまして、タリバーンも日本人を除く全外国人の退去という強硬な態度に出たわけです。これによって首都カブールも無医地区に近い状態となり、我々は今年3月、だれも行かないなら我々が行くということで、5

カブールで食糧配給の準備をする



つの診療所をカブール市内の貧困地帯に設けました。

本当に赤痢・下痢で子どもたちが次々と命を失っていく状態でした。これぐらいにして国連制裁を解いて、救援がくるだろう、何百万人の餓死者を放っておくはずがない、と思っていたところに、今度のニューヨークのテロ事件で空爆される。なぜだ、というのが一般の人々の反応でした、とにかく私たちとしては、餓死者を一人でも減らせということで「いのちの基金」を発足させ、街全体が飢餓におびえているカブールに向かって食糧を全力で輸送中です。(スライドを示し)ちゃんと私たちは旗を掲げておりまして、ジャパンという文字も入っています。これは被災地のジャララバードというところでの食糧配給風景ですが、現在(アフガン)内部に運ばれたものは小麦粉が1400トン、食用油が16万リットル。さらに補給ピッチを上げて、最終的に約4500トンを送り込みます。だいたい50万人が1ヶ月半暮らせる量で、とにかく飢餓の避難民をカブール市内からは一人も出さないため、それと爆撃でやられた被災地に配るため、現在も必死の輸送が毎日続けられています。

悲惨な状況ではあるけれど、みんな暗い顔をしてウロウロしているかという、決してそうではない。おそらく死にかけた子どもたちのみじめな姿を見せると募金は集まりまじょうが、常に死と隣り合っている状態の中でも、子どもの笑顔は明るいんですね。一般に、モノを持ってば持つほど人間の顔は暗くなっていく。何も持たない人の楽天性というのは確かにあります。

私たちが最初は、「助けてやろう」という気持ちがあった。けれども18年経って考えてみますと、私たちが受け取ったものは、与えたものより大きかったのではないかと、思っています。

少なくともこの活動を通じて、人間なら誰でもこれで幸せになれるという出来事を、直接目の前にする。水が出る、みんなで喜び合う、食べ物がくる、みんなで分け合う、という事実を通して、本当に人間にとって必要なもの、何を守るべきであって、何を守るべきでないか、ということをお教えされたような気がするのです。日本におりますと、我々は一種フィクションの世界に生きておられて、自然と人間の関係とか環境問題とか言っても、どこか紙の上の議論であるという実感を免れない。私たちはそういうフィクションの世界から、この18年間自由でいることができたのは、現地と関わり続けてきたおかげでないかと思っております。

■質疑応答～アフガンと日本の報道

●タリバーンがもたらした平和

会場 今のアフガニスタンの現状を少し詳しく教えてほしい。アフガンの人たちはいまだどういう思いで爆弾の嵐を受けているのか、また、日本というものを今どういう風にとらえ始めているのでしょうか。

中村 わずか数年ではありましたが、アフガニスタンの人たちはタリバーンによる支配を、宗教政策の行き過ぎは別として、歓迎していました。おそらくアフガニスタンという国は、報復爆撃が始まる前までは世界で最も治安のいい国だった。自転車泥棒もない、強盗・殺人はほとんどない、安全な国だったんですね。タリバーンという悪いグループが罪のない人々を支配していた、というのも正しくありません。人々は、タリバーンによる国家統一と治安の回復、平和な家庭生活を望んで、歓迎したわけです。でなければ、わずか1万5千人の軍隊であれだけの広大な地域がカバーできるわけない。もちろん、タリバーンの布告した政令の中には荒唐無稽なものもありましたが、おおむねタリバーンは田舎者政権であり、布告した政令はほとん

今回の事件に対して、私は何かの終わりの始まりだという気がします。このまま世界が続くわけではない。消費・生産ということを繰り返さないで我々は生き抜けない。無限に経済成長を続けざるを得ない。そのしわ寄せがアフガニスタンに今出てきているということです。その中で私たちの活動を通して、人間にとって共通に守らなくては行けないものを、真剣に考える時期ではないかと思っております。

少なくとも、命を大切にするという点で、我々はひとつの一致点を見いだすことができないか。国会でたまたま証人として呼ばれたときに、報復戦争とテロとは本質的に同じじゃないかという、多くの議員がせせら笑ったり、ヤジを飛ばしたりした。こういう状態で、本当に我々が安心した世界というものを築けるのか。今こそ本当に政治的な党派立場を超えて、何かを求めなくては行けない時期ではないかと、抽象的ですが思うわけです。



どが農村の慣習法でした。日本人に、一日いっぺんはご飯をたべろとか、夕方はゆかたを着なさいと言うのとあまり変わらないわけです。だから、普通の一般の貧民、農民、遊牧民にとってタリバーン政権というのはむしろ歓迎すべき存在であった。もうこれ以上かき乱さないでほしい、というのが一般のアフガン人の感情でした。そこに、アメリカの報復爆撃。なんで我々がやられなくちゃならないのか、という思いが一般的です。

自分たちもこの22年間内乱で苦しんでおり、

テロ事件の犠牲者に対する同情というのは日本人以上でした。しかも、タリバーンが民衆を情報操作しているなどと荒唐無稽な推測もありましたが、全く事実は違う。各家庭に欠かせないラジオで、みんなが最も信頼して聞くのが、BBC放送のパシュトゥー語放送なんです。国営放送というのはどうも情報があてにならないということで、みんな毎晩ラジオに耳を傾けて、我々以上に世界情勢を客観的に把握している。

軍事拠点だけやられるというのであれば多少違うでしょうが、関係のない民家なんかは爆撃されましたから、対米感情が悪くなるのは当然です。復讐社会でもありますし、おそらくこの爆撃によってアメリカはひと桁多いテロリストを作ることになる。肉親を殺されれば殺し返す、当然のことであろうと思われる。

それから対日感情にも変化が明らかに現れておりまして、ペシャワールなどのテレビでは、日本の海軍が日本の旗を掲げてアメリカ軍を守ってくる、日本というのはアメリカの50何番目かの州か、とみんな思い始めている。おそらくこれを転機に対日感情は容易に悪化し、テロ対策法を実施したためにテロの対象になる、という奇妙な逆説が、おそらく事実に違いないと思うのです。

●西側に偏った日本マスコミ

会場 18年ずっとアフガニスタン・パキスタンからごらんになった日本の報道のスタンス、それからテロ事件以降みられる日本の報道のスタンスをどういう風にごらんになっていますか。問題点はどういうところにあるのでしょうか。

中村 あまりに西側に偏りすぎた報道が多すぎた、日本人独自の見方があったのか、と思います。もしあのニューヨークのビルの崩れる映像のかわりに、毎日アフガニスタンで死んでおる子どもの姿を毎日流したらどうなったか。6千人対数百万人、だから6千人の命が軽いというわけでは決してありませんが、私ははっきり言って報道の偏りによって世界的な偏見が作られたと思う。作られた筋書き、正義の味方アメリカと悪の権化タリバーンという図式が、いつの間にか日本人の間に定着したことには、報道、特にNHKが大いに力を発揮したのではないか。朝日新聞でさえ、私は同じことを言っているの

に、9月16日に日本に帰ってくると、先生はあまりに政治的だといわれた。とんでもない、日本全体が政治的になっている。こうして戦争は起こったんだな、と恐ろしい気がしました。だから日本独自の視点というのがあってもいいんじゃないか、と思うわけです。

●もし米大統領だったら

会場 今回のテロ事件について、もし先生がアメリカの大統領だったとしたら、難民を作らないためにどういったことをされるか、お聞かせください。

中村 私が大統領であれば、水と食べ物をどんどん送る。100人殺されれば1万人助ける。地上部隊を派遣して井戸を掘らせる。こうして、本当に人々が平和に暮らせるような土壌を作って、テロというのは撲滅できる。おそらく今回の場合、ああいうヒステリックな反応をせずに、じっと黙って我々は復讐に耐える、という風にブッシュが勇気を持った決断をしたら、みんなアメリカという国を尊敬したでしょうね。日本にも同じことがいえる。アメリカに何点つけてもらうかというような卑屈なまねをする必要は少しもなかった。

ところが不幸なことに、あのような状態になったわけです。テロも報復戦争も、私たち医療関係者の目から見ると、関係のない市民まで巻き添えにするという意味では、本質的に変わりがない。こういうことをすると、おそらくひとけた違う敵意をさらに生み出すことになる。水、食べ物。一般の人がほしいのは、ちゃんと食べて、ちゃんとしたお百姓さんの仕事できて、家族が一緒におれる、それだけでいいんですね。

「アフガンいのちの基金」

カブール陥落など、現地の情勢は非常に流動的ですが、基金の募集は食糧援助だけでなく水源確保事業・医療援助なども目的として続けられています。寄付金の振込先は、
郵便振替口座番号 01790-7-6559
加入者名 ペシャワール会
通信欄に「いのちの基金」とお書きください。